

TOKYO2020へ、そしてその先に

Presented by 盛岡広域スポーツコミッション
[盛岡市 八幡平市 滝沢市 雫石町 葛巻町 岩手町 紫波町 矢巾町]

撮影・文◎盛岡広域スポーツコミッション

profile ● 梅村 錬 (うめむら れん)
1997年6月2日生まれ、盛岡市出身。177cm、82kg。拓殖大学所属。



ボクシング

梅村 錬

Ren Umemura

最強の師弟コンビが挑む

Tokyo2020

「必ず、自力でTokyo2020出場権を獲得できます」と意気込んでいた梅村錬。しかし中国(武漢)で開催される予定だったアジア・オセアニア予選が新型コロナウイルスの影響で3月に延期(会場はヨルダンの首都アンマン)となり、決定はお預けとなった。それでも私たちは、楽しみが1か月延びただけと思えばいい。それほど今の梅村は充実している。

ただ1人に与えられる予選出場の権利をかけた全日本ボクシング選手権は、昨年11月に鹿児島で開催された。決勝の相手は秋の茨城国体決勝で敗れた鬼倉龍大選手。長いリーチを生かした典型的なアウトボクサーで、接近戦を得意とするインファイターの梅村とは対照的だ。1Rは鬼倉が繰り出す確かなパンチに邪魔され、接近戦に持ち込むことができずやや劣勢。セコンドに立つ鬼柳忠彦のいつもの笑顔に落ち着きを取り戻した2Rでは、強引に相手の懐に潜り込み、得意のボディブローでポイントを稼ぐ。そして迎えた運命の3R。壮絶な打ち合いとなったが、スタミナを切らずに最後までパンチを浴びせ続け、見事に判定勝ちを取めた。

もともと、憧れの村田諒太と同じミドル級での五輪出場に強いこだわりを持っていたが、「オリンピックに出たいなら、最も可能性の高い階級を選べ」という鬼柳の強い説得に折れてライトヘビー級に階級を上げた。それから1年足らずでチャンピオンベルトを手にしたのだ。

鬼柳は全日本選手権で第3位に入賞するなどオリンピック出場を期待された選手だった。しかし大学3年の時に網膜剥離を患い現役続行を断念。大学を卒業してからは江南義塾盛岡高校ボクシング部の監督を務める傍ら、市民向けのボクシング教室を主宰していた。そこに小学5年の梅村少年がやってきたのだ。



全日本選手権のチャンピオンベルトを肩にかける梅村錬(左)と鬼柳忠彦監督

「あんなに楽しそうにボクシングをやる子は初めて見ました。錬が中学3年の時に書いた作文を読んで、こいつは日本一を狙えるかと直感しました」。その目に狂いはなかった。高校時代の梅村に鬼柳が与えた技術的な指導はただ一つ、「ボディを狙え」。梅村はこの一言で強打一辺倒から攻撃の幅を一気に広げ、高校5冠を達成するほどの選手に成長する。技術的な指導よりも「信頼される大人」であることに心を砕いてきたという鬼柳に対し「勝ち負けだけではないボクシングの楽しさ、奥深さを教わりました」と語る梅村。母子家庭に育ち、しかも一人っ子の梅村にとって、鬼柳の存在は「恩師」であると同時に「父親」であり、少し年の離れた「兄貴」でもあった。

梅村は中学3年の時の作文にこう書いている。「2016年のリオデジャネイロオリンピックに出たいです。リオデジャネイロがダメだったら、次のオリンピックに必ず出て活躍します。(略)練習を信じ、先生を信じていけば、必ず強くなって次から次へ目標がなくなることはないですが、できるだけ目標を少なくしていけるように頑張っていきたいです」。

7年の月日が流れても、ボクシングを愛しオリンピックを夢見る少年の純粋な心はまったく変わっていない。「将来は鬼柳先生のような指導者になって、たくさんのお客さんを育てたい」という梅村。まずは半年後に迫ったTokyo2020出場、そして金メダル獲得という一世一代の大仕事が残っている。(文中敬称略)



盛岡広域スポーツ
コミッションの
情報はこちらから